

「熟考・評価」を育てる読書指導

新潟大学

足立 幸子

1 解釈の悲劇と「熟考・評価」

前回は、読解リテラシーの5つのアスペクトのうち、「幅広い一般的な理解の形成」を取り上げた。これと「解釈の展開」を「解釈」、「テキストの内容の熟考・評価」と「テキストの形式の熟考・評価」を「熟考・評価」とまとめて呼ぶこともある。今回は「熟考・評価」を育てる読書指導を取り上げる。

ポイントは、「解釈」は「基本的にテキスト内部の情報を利用」し、「熟考・評価」は「外部の知識を引き出す」ことにある。「外部」というのは、テキストの内部にないこと、すなわち、読者が持っている知識や価値観である。私は解釈の悲劇と呼んでいるのだが、従来我が国の国語科教育で解釈と呼んできたのは、PISAではむしろ自分なりの考えを含んだ「熟考・評価」であったと言つてよい。そのことが混乱の原因となっている。つまり

「熟考・評価」は、自分の知識や価値観に照らし合わせて、テキストがどうであるかを評価するのである。

ところが、従来の国語科では、そのようなことは自由に考えてよいこととし、テストしなかったり、逆に何でも正解にしてしまったりした。しかし、それは間違っている。個人の自由な考えそのものではなくて、それを要求や条件に従つてどのように述べたらよいかを国語科で扱うべきだった。今回は、「熟考・評価」を行わせて自分の考えを適切な形で述べさせている二つの読書指導を紹介する。

2 「熟考・評価」を育てる二つの方向

「熟考・評価」とは何か、まずは三省堂中学校国語科教科書『現代の国語3』掲載の教材「平和を築く」をもとに説明する。この教材では、ジャーナリストである筆者と写真記者がカンボジアの難民キャンプを取材し、過酷

な状況下で人間らしい心を持った二人の少女に遭遇し、平和はこのような人間らしい心を十分に発揮させる社会を築くことであると主張する。平成一八年版では、国連難民高等弁務官事務所提供の資料から難民数の増加を示すグラフも掲載している。グラフと合わせて読むことによって、単に筆者のように平和を願うだけでは、難民数を減らすことは無理だという現実が見えてくる。つまり、以前なら生徒は筆者の考えをテキストから「解釈」したところで読みは終わっていたかもしれない。しかし、グラフという外部の知識があれば、筆者の考えがよいのかどうかを、「熟考・評価」することができるのである。

したがって「熟考・評価」を育てる読書指導では、「外部の知識を引き出す」やり方を、生徒に示せばよい。それには二つの方向がある。一つは、「平和を築く」のように、他の材料を提供して、生徒の持つべき「外部の知識」を充実させる方向である。もう一つは、生徒の既有的知識・価値観を「意識化」させることである。いずれにせよ大事なことは、その知識・価値観に基づいて自分の意見を述べることを、要求や条件に応じて適切に行わせることである。何でも正解ではなく、どのような述べ方をすればよいかまでを、教師がしっかりと見届ける必要がある。この二つの

方向にそった読書指導例を紹介しよう。

3 「外部の知識」を充実させる読書指導

大村はまの「批判的に読む」という指導は、このタイプの読書指導である（『大村はま国語教室第八巻』筑摩書房、一四二―一五八頁）。福沢諭吉やシュリーマンの、自伝と伝記数冊を比べさせている。この実践が優れているのは、発展読書・比べ読みなどと言って複数の本を与えて放っておくのではなく、気づいたことを自分の考えとして構築させ、適切に述べるところまでを指導している点である。

福沢諭吉の方は、「自伝のおもむき」を伝えているのはどれかを生徒が話し合う。例えば、自分が学んだオランダ語が役に立たないと諭吉が気づくエピソードについて、それぞれの本にあった「シヨック」、「足元がくずれてしまつて」、「愕然とした」という表現を話し合う。「シヨック」は「荒っぽくて粗末な感じ」、「足元が……」は落胆の様子をよく現している、「愕然とした」は新しい語彙だが、辞書を引いてみて適切である、などと議論が深まっていく。このようにして、外部の知識を充実させ、語彙を増やしていけば、他のテキストを読んだときに、いかにその表現がよいかどうか、評価できるようにするのである。

シュリーマンの方は、てびきで、「自伝のこのことを省いてある、なぜだろう。子どもへの読み物としての配慮であろうか。」「ここはつけ加えられている。ほかの資料によつたのだろうか、想像だろうか。」など、他の材料から自分の知識を充実させるポイントを示している。そしてこれらのポイントを話し合った後、自伝と比較して他の伝記を批評する文章を書くのである。

どちらの場合も自分の考えを立ち上げ、適切な形で表現するところまでを指導しているのであるが、そのためには生徒同士話し合う場を設定しているのが特徴である。ブックトークの聞き手など、本を読んでもいない生徒では、どのような考えでもよしとなつてしまふ。そうではなくて、同じ本を読んだ生徒同士で、考えを表明しあい、すり合わせるということを行い、自分の考えを適切な形で述べることまで指導しているのが特徴である。

4 既有知識を「意識化」させる読書指導

アメリカの読書指導法にリテラチャー・サークルがある。『現代の国語3』（平成一八年版）には二〇七頁に「ブッククラブ」という名前で掲載されている。この中の「コネクター（接続者）」というのが、このタイプの読書指導に該当するので、紹介してみたい。

〔現代の国語3 学習指導書 資料編活用のために〕の一八〇―一八三頁参照。）

リテラチャー・サークルでは、三人〜五人の少人数グループで同じ本を読む。何章かに区切って、それぞれ同じ本を読んでくるのだが、別々の読み方を担当してやることになっている。「コネクター」は、本を読みながら思い出したことをメモしてくる。「ああ、私も昨年同じようなことがあったな。」「あれ、これは、前に〇〇の本で読んだことがあるから、知っている。」という具合である。それを次にグループで集まった時に、上手に表現しなければならぬ。そうやって、グループで役割を変えながら一冊の本を読み切る。つまり、意識化した自分の知識を、グループに受け入れられる形で述べるところまでが保証されているのである。

5 おわりに

以上、今回は、本を読みながら、「外部の知識」を充実させたり、既存の知識を「意識化」させたりし、立ち上げた自分の考えを適切な形で表現させることで、「熟考・評価」を育てる読書指導を紹介した。

あだち さちこ 新潟大学教育学部准教授。P・I・S A2009読解リテラシー国際専門委員会委員。読書の指導法、評価の研究を行っている。